

ローマンチック時代に於ける青年史家の生立（下）

文學博士 坂 口 昂

三、ローマンチック環境

ランケが籠城主義のプフォルタの學院を出て、新に入つた境涯は、自由戦役の基調の上に主として立つて居る學生生活であつた。即ち、一八一四年春から一八一八年秋まで四年半間のライプチヒ

大學々生々活、次に、それから一八二五年春まで六年半間オーダ河上のフランクフルト中學教師としての學生的生活である。而してライプチヒはランケの祖先以來彼の家及び故郷が所屬したザクセン君家の大都市である。その大學はランケの父の曾て學むだ母校である。彼は父に送られてこゝに入つた。しかし、彼のこの大學生活の初年には實にヴィーン列國會議の開會があつて、ランケの

故郷はザクセン王國からプロシヤに割讓され、彼の父は圖らずも、プロシヤ王國の官吏となり、彼はその臣民と化したのであつた。

そこで吾人の主人公のこの如上の新境遇と、今や新たに改造された、若くば改造されやうとする世界との關係如何、特には、如上の新たに恢復且つ擴大されたプロシヤ國家との交渉如何、これらは、彼の生立につきて尤も注目すべき重要問題である。

眞先きに起る疑問は、自由戦役が作り出した基調とは何か、といふことであらねばならない。これは他でない。第一には、ナポレオンの諸國民の自由蹂躪、第二には、諸國の爲政者が佛蘭西大革

命及びその影響を怖るゝの極、自分の國民に對して取りつゝある保守主義、是等二つのものに反對しておのづから喚起されたる一種の民主的反抗氣分である。この氣分は夙に大革命の亂暴、ついでナポレオンの統一政治に對して馴致されつゝあつたが、自由戰役といふ極めて痛切重大なる危機に於て勃發して始めて大成の緒についた。それは固より今日の民主的傾向に比べると、頗る幼稚、否な粗笨なるデモクラシであるけれども、未熟ながら、ともかく國民の獨立を主張し、人民の自由にあこがるゝ一種の熱烈なる反政府的人民的風潮として、一個の動かすべからざる時代精神の實在であつた。

しかしながら、この民主的氣分を作り出した自由戰役なるものは、單に諸國民の民主主義のみの運動ではなかつた、實は諸國の君主々義が人民を指導統率することに依りて始めて實行され、始め

て成功したものである。そこで戦後の善後處分に於ては、君主々義は、大革命破裂以來の二十年以上の混亂と革新との傾向に反動を起して、次第に優勢となり、一切の革命的要素の壓伏に決し、とかく人民の要求を無視した。何となれば凡そ人民の要求は宛ら第二の革命主義と見なされたからである。之を人民側から見れば、戦後に恢復された君主々義は、十七八世紀の專制世義の復古であつて、その壓制はナポレオンのそれに異ならぬものである、因て彼等は自由役の餘焰に乗じて爲政者に對する反抗的態度を取つた。即ち是れ、在朝者からいへば、大革命及びナポレオンに對する反動若くばそれ以前の舊き政治に向つての復古の時代と稱するもので、在野の識者からいへば、反ナポレオン時代に發生した人民の自由、國民の獨立といふ要求が一層切實に刺撃される時代である。君主側では、可成的憲法の制限を避けやうと努め、

反對側では、出来るだけ憲法を作り上げやう、その既に有る場合には之を保持腐行しやうといふ君民對抗の時代である。但し、今日いふ所の社會主義といふが如き深刻な組織的なる第四級の要求がまだ當時の實際界の活動要素とはなつて居なかつたことは勿論である。

この反革命コントラレガオリエションと憲法的要求との相對抗しつゝ作つて居る時代の波瀾のうち、夙にローマンチックの文化思潮が會流して之と密接なる關係を作つて居る。これが大いなる歴史上運命であつた。

抑もこの思潮が當時の實際界と如何なる交渉を結んで居つたかは、頗る廣汎・複雑・難解な問題でこれを單純に簡明に解釋するは眞に容易の業でない。殊に本講演の如き限られたる目的を有する場合に於て尤も然りとす。而もこの目的そのものために、私は出来るだけ正確簡明に、豫め掴むで

置く必要を感じる。いで少しく説かう。

吾人は再び十八世紀に跡返りしなければならぬ。當時流行して居つたかの啓蒙思潮なるものは理性主義が卓越し、理性生活が感情生活を壓倒する傾向を有つて居た。そのうちに於て、高遠なるかの希臘羅馬崇拜の古典主義や、人生一般の進歩や、天地自然の理法といふやうなことが高調せられたのは、悉く理性主義の卓越に歸することが出来る。この傾向が政治上社會上に實現してかの佛國大革命となつたのである。實にその内に於て、特權の打破、人權の宣言、基督教の廢止、理崇拜などがあり、つゞいてナポレオンのコンスル政治並に皇帝政治となり、藝術上では帝國式となり、言論の壓迫思想の統一ともなつたのである。即ちすべて人民の感情の自由を抑壓し、民族の習慣、國民の傳來、祖先の宗教を蔑視し、いはゞ純理の權威と暴力の支配とを極端まで徹底實行さす世の中

となり、その極、只だ新しい形式であるばかりで實は舊時代に劣らない亂暴狼藉が振舞はれ、却て不自然不人情なる社會となつた。そこで、この政治の頭目たるナポレオンに反抗して、佛蘭西では既にステール夫人や、シャトープリヤンが現はれた。是等の先覺者は故國に安んじ得ず、國外に亡命し、詠歎と思索とを以て時局の改革、社會の改良、自由の恢復、或る意味では革命又は天下統一に對する反動を説いた。即ち是れ人民の感情を主とする主觀主義、古の傳來を重んずる理想主義の發現で、實にローマンチック風潮の先驅を形造り諸國に於けるその發動を促進したものである。

翻て同時代特に十八世紀中葉以來の獨逸を見るに、こゝにても、夙に希臘羅馬の古典に對するあこがれを抱きながら、而も自己の感情を自由にいひ現はさるゝとする慾求が高まつて來た。先づ、十七・八世紀の天下を風靡した佛蘭西文學の典型、

否なその束縛から離脱して、自己の衷心から迸り出る或物を作らうといふ傾向が獨逸人の間に現はれたのはこの時である。當時の彼等は中古以來涵養された彼等固有の文化を孤負しながら、而も自家の國家組織を受けて居ない民族であつた。換言せば、彼等は政治上に於ては、殆んど何等の威力をも發揮し得ない、何等の興味をも抱くことは出來なかつた。そこで彼等はその代りにせめて自分の精神文化の誇を以て自ら慰めやうと思ふた。それ故に、彼等の間で、自分等が同一共通の高尙なる民族に屬すてふ文化感情をかり得てこれを同胞の間に互に頌ち與へんがために、彼等の精神的上流に位する人士らの指導の下に己等の胸中に一個の新たなる集中的、統一的根本觀照を抱き上げんとの努力が起つた。彼等は畢竟、自家の自主自立的思索家若くば詩想家ならんとした。かくの如き者として、獨逸の知識界に一個の統一ある意志を

鼓吹し、共通の觀念を頌つべき偉大なる頭、若くば濫い胸の人は乏しくなかつた。即ち約半世紀のヌツルム・ウント・ツラングが生み出した偉觀、文學者側では、ヘルデルや、ゲーテや、シルラ、哲學者側では、自我哲學の唱道者フイヒテは各その代表者であつた。而して是等の指導者が與へた衝動に感激して、幾多の人材のやむにやまれぬ若き心の悶から、自分等はよしや少數ながら優秀有力なる知識の一團を作つて、自分等に反對し若くば自分等を理解し得ない、又は欲しない群庸の徒に對立するに至る、これは自然の成行であつた。その結果、如上の巨人連の醸成した零圍氣のうちで十八世紀の末から十九世紀の初にかけて既にシユレーゲル兄弟や、チークや、ノヴァーリスや少しく若手ではグリュム兄弟などが現はれて來た。

その内、ノヴァーリスは尤も代表的青年である。彼は多感な青春詩人として若死し(一八〇一年)、

且つ深刻に感情を謳發した點で、或は英國の感傷詩人シェレーに比せられて居る。しかし彼はかくの如き宗教上異端者でもなく、飄泊者でもない。彼はチューンゲン山中に於ける一小地方吏として身を了へた。初め、當時シルラやフイヒテが教授となつて居て隆盛であつたイエーナ大學に學び、就中、尤もシルラの感化をうけて精神的となり、彼の天性と特殊の生活關係は次第に靜寂なる境地をよろこばしむるに至つた。この多情多感の青年は遂に夜をうれしみ、死を慕ひ、ひたすら無限即ち理想の境涯にあこがれ、これを『青き花』ディンクラウエンブルメと名づけた。この『青き花』なるものは、よしや現に肉眼で視、うつゝに手で摺む能はざるも、その幻を想ひ、その影を追ひ、その香を慕ふべきであつた。

彼はおのづから民族の祖先を追懷し、中古生活の榮えに耀く羅馬加特力教會に隨喜渴仰した。『十九世紀文學の主潮』の著者ブランドスはこの『青き

花』戀ふる詩人を取つて、同時代の佛蘭西の革命兒に對比して曰く、『彼は三色を帯びマルセーエーズを高唱する佛蘭西の健兒と同じやうに、ひたすら自己の内界を以て外界の改造を熱望して居る。而も兩者の内界には大なる差異がある、革命兒のは理性である、詩人のは心である』と。

蓋し啓蒙及びそのつゞきなる大革命時代に於て純理の權威が徹底的に實行され、暴力の支配が容赦なく發揮されるといふ、この明々察々にして峻嚴苛酷を極めた理性生活は、さながら赫々たる烈日の輝くところ、一切を燬きつくさなければやまない荒ぶる神の如き大勢力を振舞つた。その反動として、こゝに感情生活が萌芽して、和かな涼しい黄昏の色や、靜かな床し味つゝむ夜の蔭があこがれるのは、自然の順序といはなければならぬ。即ちこゝにローマンチックが起るのである。このものは己が心のひたすら無限なるものに葵向する

あこがれ、即ち直接の利害を超越して理想を思慕する情念に外ならない。これノヴァーリスの所謂『青き花』が象徴し、十九世紀上三分一期に發生卓越した文化的基調である。一切の生活方面は之によつて貫かれ、批評にも、藝術にも、宗教にもはた社交にも、のみならず、政治に於ても亦た實現すべきであつた。

しかしながら、茲に注目すべきは、ステール夫人等を魁とする佛蘭西からのさすらひ者流のローマンチックは、最初から政治的社會的色彩に富んで居つたが、獨逸のローマンチックは當時未だ何等の實際的傾向を帯びて居なかつた。即ち政治的要素としての民族的又は國民的色調は、殆んど全く缺如し、只だ純粹なる世界市民的であり、田園的でナイーズで將た尙美的好事家的であつたことである。

然るに一八〇六年、イエーナ、アウエルシタット

戦後の大事變は、忽ち獨遊のローマンチックを驅つて實際界に入らしめたのである。ナポレオンの天下獨裁政治に反抗してシタイン^{II}ハーデンブルグの改革が始つたのはこの時である。この危機にフィヒテがイエーナから伯林に招聘せられて居る。

彼は大學に於ける通俗講演を行ひ、『獨逸國民』に警告した。アルントは『時代精神』を呼號した。ヤーンは體操^{ツルン}を以て青年を鼓舞した。すべてが『物質上損失を精神上で賠ふべく』活躍した。やがて自由戦役の焰が爆發した。幾多の志士は蹶起した。若き而も運命づけられたケルネルは『劍の歌』を謳ふた。かくの如くして従來靜かなる心の世界に於ける感情生活であつたものが、一躍して活潑なる實世界に於ける自我の運動となつた。この精神的風潮は外國に對しては佛蘭西人、特にその革命及びナポレオンに對する反抗となり、國內に於ては國民的統一のあこがれ、民族的自由の慾求となつ

た。隨つて、一面には、前述の如く、ツィーン會議及びそれに後に於ける王政復古、君主專制主義の再現を助長し、他面では、當時の民主的傾向の原動精神を煽り立て、在朝の爲政者の態度が政治上反動に陥れば陥るほど、民間識者の反抗運動を激成した。

しかし、朝野の精神的傾向は、かくの如く二つに岐れて來て居るけれども、根本に於ては即ち一つであつた。自由戦役の標語『神と共に國王及び祖國のため』(Mit Gott, für König und Vaterland) プロシヤの動員した豫備兵の帽子の徽章の銘)が尤もよく之を標徴して居る。當時朝野翕然として宗教的風尚を成し、中古の昔を懷古し、之を理想的に光榮あるものとして追慕し、ゲルマニの古傳説が謳はれ、一方では羅馬加持力の信仰から、他方では古い祖先の異教的思想までの間を往來する中古騎士生活があこがれの對象となり、その口

ローマンスが流行した。舊教會は再興一新し、ゼス
イタ教團は恢復した。新教は堅固となつた。新教
に屬する學者の内には自ら好んで舊教に改宗する
ものさへ少くはなかつた。この際、ゲルマニヤの
青年らは自由戦役の餘焰未だ醒めないのみか、爲
政者の躊躇して、苟息保守に流るゝに反感を抱き
一八一七年ワルトブルグに於て、教會改革の三百
年記念を機として、青年組合の大會を舉行した。

その翌々年ジョージ・サントといふ一學生はロッ
ツエブエを暗殺した。被害者は、いふまでもなく
十八世紀以來、劇壇で鳴らした老文學者で、露西
亞の手先となつて反動のために働いて居つたから
青年等の怨の的となつて居た。而してその加害者
は、決して無規律な放埒者ではなく、眞面目な宗
教的の青年で、ゼスイタの教士の話をして居た
學生であつた。

要するに、ローマンチックは理性主義に反對す

る感情主義の發現である。一般的には、遠い希臘
羅馬の古典や獨逸にありては、佛蘭西の如き外國
の古典に對立して、自己の人民民族・國民といふ我
自らの憧憬から發し、遂に反ナポレオン運動の機
會に於て、翕然として廣大なる宗教的精神的傾向
を成し、而も對ナポレオン問題と共に起りたる世
界改造期に於て君主と人民、專制と自由といふ對
抗を助長する文化的勢力となつたものである。

0c. Brandes, Die Hauptströmungen der Literatur des 19.

Jahrhunderts Deutsche Uebersetzung, Bd. II: Die romantische

Schule in Deutschland S. 191-246.

四. ランケのローマンチック前期

學生及び教師

かくの如く、獨逸の思想界が二個の反對要素の
對立に分れつゝある瞬間、吾が未來の歴史家はラ
イプチヒ大學に入つてその學生となつた。このチ
ューリングゲンの田舎から筈ひ出た青年が、始めて

自由の身となり、始めて強く浮世の潮流を感じたのは、この時である。

彼の思出によると、彼が接した教授連のうち、尤もふかく彼に影響を與へたのは、當時一流の文法家にしてその批評家であるゴットフリード・ヘルマンであつた。この學者から、彼は最近にプファルタ學院で準備した古典の知識を一步先へ進めてもらつた、殊にツッキデスを根本的に讀むことが出來たのは、この時であつた。しかし、歴史の講義ではこれといふ感化を更けた教授はなかつた。但し講義以外で受けた精神上感化につきては流石に彼はこの間にカントも讀み、フィヒテも見た。殊にフィヒテは、恰もランケ入學の年の始に、既に國難に殉じて居る思想界の巨人として、ランケはその通俗的論文、就中その『獨逸國民に告ぐ』る一文に最もふかく感動された。又た自然ルテルを愛誦し、恰も一八一七年にはかのワルトブルグ祭

が行れたことゝて、この國民的偉人に對する彼の感情が高まつたらしい。同じ年の秋には、學友と共に、ローマンチックの記念に富めるライン地方へ徒步旅行し——吾人の對象とするランケの青年期には、まだ汽車が出來て居ない——その時ハイデルベルグにも遊びてその有名なる繪畫をも見た。歴史の書物では、ニーブールの羅馬史をその初版で讀み、『自分が獨逸語で書いた歴史で、始めて強い感化を受けた書物はこれである』と告白して居る。同じく現代の人ではゲーテを崇拜するやうになつたが、しかし『ゲーテは之を眞に味ふには自分には餘り現代的であつた』と白狀して居る。これで見ると、彼は當時の流風たるローマンチックには可なり接觸して居るけれど、彼自らが本質的にローマンチックたり得ないことが豫察される。

つまり、ランケのライプチヒに於ける四年間の學生々活の間に、尤も強き精神的印象をうけたの

はルテルと、フィヒテと、ニーブールの三人であつたといへる。されど何か専門的知識を取得するには、彼の言葉を借りていはゞ、彼は餘りに多くに手をつけ、餘りに多くを企てたのであつた。

彼は一八一七年の初に、既にドクトル試験を通過して居るが、彼の學問に眞に専門的傾向の起つて來たのは、その翌年、ライプチヒを見すて、フランクフルト・アン・デル・オーグの中學教師に招聘されてからのことである。彼が將來の歴史家として眞の生立はこの勤務中に始つた。また、彼がプロシヤ王國に奉仕する生涯も、亦たこゝに開かれた。この在職は六年半に亘つて居る。吾人に公にされたかの書簡は實にこの時に始つて居る。當時の書簡は後年の思出と相俟ちて一青年教師の生活とその情緒とを頗る明瞭に言ひ現はして居る。

ランケは上級教師オベレラーに任命せられた。上級教師の

同僚は彼と共に四人、その一人が校長を兼ね、四人ともいづれも元氣潑刺たる青年で、いづれも未婚で、殆んど學生同然の生活をした。

加ふるにこの仲間へまもなく更に一人の好青年が飛び込んで、この團居を賑やかした。それは即ちランケのすぐ次の弟ハインリヒで、年甫めて二十歳、兄の思出によると、全く麗はしい親みある若々しさて、あらゆる人に好かれ、市の或る私立學校教師となり、當時若殿ばらの意馬心猿を狂はしめたツルン運動にも兄よりははずつと熱心であつた。實はレオポールドがこの時始めてこの當世向きの青年運動に親しく近づきて、その有様を察知することが出來たのは、この快活な弟の御蔭だともいへる。この頃、ヤーンの一行がそのシレジヤ地方ツルン行脚からの歸るさに、フランクフルトを過ぎつた。弟は身も魂も打込んで之に加入し遂に伯林までも尾いて行つた。この時、レオポー

ルドも親しくヤーンと話す機會を得た、そして一行を町はづれまで見送つたが、しかしそれ以上、ツルン運動に關係しなかつた。この兄弟の行動の相違は、一は兩人の職務の別にもよるであらうけれども、主として兄弟の性情の相違から來て居るやうである。尙ほ、この際にうけた感じを基として、ランケは或る高等なる官憲が幸ひ偶然知合となつて居たから、この人に向つてヤーン及びその運動のために、政府當局の心配するやうな危険はないことを上申し、誤解を釋かうと力めた。その手紙が残つて居る。又た弟は宗教上に於ても兄とは異つて居る。レオポールドの信仰は宗教的哲學的で、頗る敬虔なる基督教信者たるを失はないが、さればとて十八世紀の甚しい理性的信仰に偏しない、將たまた反動的ローマンチックに有り勝ちなオルソドックスにも傾かなかつた。然るに彼の弟は頗る感激的性情の持主であつて、最初は全然

理性的信仰に馳せて居たが、後、幾ばくもなくランケの尙ほフランクフルト在職中の半途に、リューゲンに向つて去り、そこに居る或る牧師に就いてからは、反對に全然オルソドックスに固まつて、一生その傾向を持し、終に南獨、バヴリヤの王國領内の新教市であるニュルンベルグの牧師及び敎職になつて了つた。兄は一體よく聖書を讀みて、之を尊敬することに於て人後に落ちなかつたが、彼の穩健なる性質と、文獻的歴史の見地とからして、到底敎會キルヒ的信仰に入ること出来なかつた。この點に於て、兄弟の間に意見の相違が出來て、遂にそれ／＼行くべき各自の道に岐れて進むことゝなつた。この際、一時兄弟の間に感情の行き違ひを來したが、兄は到頭自分の信仰の立場を維持して下らなかつた、而も彼は衷心からハインリヒを愛するものであつたから、間もなく互の友情を恢復し、弟の死ぬ一八七六年まで永く親密

な消息を交はした。『書簡抄』の手紙三百二十九通の内、四分の一はこの愛弟に與へたもので、尤もよくランケの情緒を披瀝して居る。

然らば、ランケが中學教師として在職中に得た所は何であつたかといふに、前述の如く彼及びその環境が尙ほ學生的生活をつゞけて、彼に若い氣分の刺撃を與へたことがその一つである。彼の思出によると、これは『只だ學問とイデーにと捧げられた一つの寄合ひの時期』であつた。次に特筆すべきものがある。それは、この任地が固よりランケには偶然の赴任であつたけれどもその舊い大學の建物に、ウエステルマン圖書館があつたことだ。これは頗る豊富な文庫で、中學教師の用に充てられて居た。ランケが凡そ文庫なるものを自由地使用しうることになつたのは、これが始めてであつて、彼はこれを最も愉快なるものであつたと思ひ出して居る。更に利益となつたものは受持

の授業であつた。彼は最初上三級、殊に第三級を多く擔任し、主として古典を教え、ホーマ、ホラーツ、ヴァヅル等を讀ました。彼は生徒が自分の世界史的物語をよく聽取つて呉れるとて喜んで居る。しかし是等の授業は文獻が主で、その内に歴史の要素が入つて居るばかりであつた。ところが後には、最上級の古代文學史を受持つことになつた。これ、ランケが文獻學的研究から史學的それに容易に移りゆく階段であつた。この授業で、彼は從來讀まなかつた幾多の古典歴史家を讀んだ。之と同時に近代人の著した希臘羅馬に關する有名な史籍にも目を通した。ニーブール、オトフリド・ミュラ等はこれである。つまり、ランケの史學の基礎を形作つた要素の一は、是等古今殊に古典の史籍を讀んだことである。この意味に於て、歴史家ランゲなるものは史籍の讀者ランケから生じたのである。

最後に、彼が、彼の所謂只だ學問とイデーにと
に捧げられた寄合の中で、時代のイデーと如何
なる交渉を作つて居つたかを考察しなければなら
ない。換言せば、如上の交友關係と世上の出來事の
感じとが、當時の若い未來の歴史家に如何なる影
響を及ぼしたかといふことである。

これにつきて、私は彼の同僚の一人ハイドレル
なるものを引合ひに出したい。この青年教師もラ
ンケと同じくプロオルタ出身で、既にジュルツブル
グ、ハルレで教師をつとめ、ランケよりも可なり
世間をして、ランケから一二年後れてフランクフ
ールトに來たのだ。彼はランケと同じ宿で上下に
泊り、何か最近の新聞事件が報道されると、上と
下との窓と窓との間を互に怒鳴り知らすといふ遣
り方で、兩人意氣相投じ、共同の讀書もし、相互
の批評もし、一所に散歩もした。

一八二〇年イスパニヤ及びナポリの革命破裂の

時、三月末の日附で弟に與へたランケの手紙に、
『私はハイドレルと楽しい時を過ごした。……』

兩人飲むだ。卓上に新聞がある。英雄リーゴの前
進、コルンナ、ナバラの出來事が載つて居る。吾
らは讀みによむだ、カデイズよカデイズよ醒めよ！
吾らは愉快に酔ふて歸つた。彼はいふ、「しかし君
！僕はまだこの自由のために死するまでに決心し
得ないが」と前置し、互の「間で神のいろ／＼の現
れについて話し、……しかし吾々は凡そ神が自
由に解放されるために、死ぬことに定められて居
ると語り合つた。私はストーヴの側で立ち、頗る
感激して居る。彼は室をあちこち歩いた、私は遂
に黙した。彼はもつと話せ、もつと促す。最後
に二人は互の腕に落ち合つて、三たびのグートナ
ハトで分れた」とある。青年の肝膽相照らす状が
まぎ／＼と見える。同じ書簡に、引きつゞきてラ
ンケの感激が傳へられて居る。曰く『それは實に

全く甘い、あらゆる世紀の豊けさを御馳走にして

あらゆる英雄を目と目に視、も一度、殆んど、かに、宛ら生きながら一所に生活してみることや、これ全く楽しい、これ眞に蟲惑的だ。(中略) 今休みが来る。しつかり勉強すべきぢや、自分は十五世紀の諸國民の生活、古代が蒔いたあらゆる種子の今一度の發芽——宛ら古への花の榮えが散り亡

せて、而も長い間埋もれた種子が再び芽ばへするかのやうな——この發芽を何とか調べてみたい。

自分はまだこれについては何も知らない。しかしだ、自分はこの努力シュトレーベン、この生成ビルデン、この意慾ゾオルレンが學問

ある上流社會に在るのではなく、或る形で人民フォルクに存して居ると豫感する。これは教會改革レフオルマチオンから自分

の推知する所だ。(中略) あらゆる歴史のうちに神が住み、生き、認められる。一々の人間の行動が彼のしるしである。一々の瞬間が彼の御名を説く。

されど自分思ふに、最も明確に現はれて居るのは

大なる歴史の結合する所に在る。(中略) 進め！如何に成り行くとも、只だ／＼吾らが自分らの立場で、この聖き神ヒエロソッフの記録の秘密を解くべく進みゆけ。かくして吾らは神に奉仕する、祭司もさうだ。教師もまた然り』重ねていふ、これは彼の愛弟、今はニュルンベルグの牧師に與へた書簡の一節であつたことを。

以上描き出したフランクフルト生活に據るとランケは元來十八世紀の學者と同じく、自分の學問の基礎を古典の讀書に置いて居ることは明瞭である。しかし十九世紀に勃興しつゝある國民乃至民族生活といふものにも、深く感動され、十分潜心研鑽しつゝあつたことも確實である。即ち彼はよしや當代流行のローマンチックなものには全然没頭し得る人たることは出来なかつたにしてもローマンチックが喚起した雰圍氣には十分に觸れて、その豊かなる波動の影響を蒙りつゝあつた。

されば上段に引用した書簡をかけた二年後、一八二二年夏休みの終には『ミカエル休みも明日で仕舞だ。日々世界史に關する知識と見識アウスジヒトが擴大する。誰か個ダスインゼイグム性の中核、天性、生活の秘を開くものぞ。私は自分にも、他人にも、あらゆるものにも、最も多く或は失望し、或は望を囁する者の一人だ』と自己の心中の進境と同時に煩悶を訴へて居る。

このランケの研究の進行中に、一旦は彼の良心問題が起つて居る。それは、當時プロシヤ政府がメツテルニヒのメスマリズムに罹つてますく抑壓政策を執ることになつたからである。ヤーンは禁錮されて居る。アルントは裁判に連坐して、文筆の自由を奪はれた。ローマンチック學者ゲールスは亡命して居る。伯林政府は更らに嚴重に危険思想を取締らんとて、一八二二年の春、勅令を發し、凡そ説教者並に教師を採用任命する際、一切

のデマゴーゲンを排斥することゝなつた。その上に之を勵行するため文部大臣にはさすがに幾分の思ひやりがあるから、その人一人に任かさないで、必ず内務大臣の同意を要するといふ條件さへ附せられた。プロシヤの國教たる新教が從來抗議派プロテスタントと呼ばれて居るを、不穩と認め、今日の如く之を福音派エヴァンゲリシと改稱したのは恰もこの時である、以て當時の官界の思想傾向を卜すべきである。ランケは、如上のデマゴーゲン取締令に對して、自分自らの危険の虞はないが、而もこれは自分の就職の時と約束が違ふ氣がして、精神上極めて不愉快に感じた。のみならず、自分の多數の弟らがそれ／＼プロフェシヨンに就く場合に甚だ面白くない既にかの多感な青年ハインリヒはニュルンベルグに去つて了つた。これは政府の迫害を避けた筋合になつて居るやうである。この新發令の時には丁度次の弟フェルヂナンドが求職中であつて、或は

ハインリヒの跡を追はんとして居る。しかし一旦そんな外國の職につくと、永久にプロシヤの官界に歸ることは困難だらうと氣遣はれてゐる。それは現に文部省の學校官吏カンブツの意向と察せられる。ランケはかたぐいプロシヤ政府にいや氣がさしたと見え、バヅアリヤの學者フリードリヒ・

ティエルシに書を送つて、その國の新教市の教職若くは都ミュンヘンならば、圖書館を利用しうる職務の周旋を求めた。又た同國領内エルランゲン大學の教授デーゼラインにも、然るべき轉任口の世話を依頼したのも、この頃であつた。因みにいふ、當時プロシヤは反動のどん底に陥れて居る。憲法生活の約束も蹂躪され、その望殆ど絶えた。その反對に却つてバヅリヤ王國には夙に憲法が實施されて居るといふ時代であつた。かたぐい、ランケのフランクフルト在職の後半期は彼の生涯の危機であつたのである。

されど轉任の機會はすぐには來なかつた。その内に彼の世界史的研究がだん／＼進みて彼の處女作が出來上つた。それが極めて意味ある著作で、隨て彼の史學上の將來も、將たまた彼のプロシヤとの關係も、之によつて大體に決定されることゝなつたのである。

先づかゝる意味ある著作がどうして出來たかといふことにつき、その根本的解釋の必要はないが一つの挿話をさし夾みて之に觸れてみるのも無用であるまい。當時は、さきに一寸述べた通り、歴史的ローマンズの流行の時で、かの英國ではサー・ウォルター・スコットが頻りに創作して有名となつた。ランケは自分の研究の途次、偶出版されたスコットの『ケンテン・ツルウアード』（一八二三年）を読んだ。そして之をかの十五世紀の有名なコミーヌの覺書と比べたところ、事實と非常に違ふ。而も事實の方が小説よりも却て面白いと感じた。そ

こで、彼の心中に、凡そ歴史は所傳の事實を基礎として、當時の事蹟をありのまゝに表現すべきものであるといふ確信が、ますます高まつて來た。

これも亦た老後の思ひ出での一である。

然らばランケ自らは如何なる作品を提供したか。他なし、『ローマ風ゲルマニ風諸民族の歴史』これである。^⑥この著作が如何なる新味を含むて居るか。第一、その世界史的考察である。諸民族を統一的に擱みて、一の纏つた團體と見なし、その間の國際的世界的關係を發見描出したこと。第二、文献的批評的方法である。これは説明するまでもない。これにつきては、その副産物として『近代歴史家の批判』と題する史料批判を附録とし、自分の立場を明かにした。學問上ではこの附録がなかく／＼價値を有つて、本文と共に世人の注意を惹いた。かくの如き全然新見地に立ち、新方法によつた史學史上の時期劃作的勞作が、地方中學の一

教師から提供されたことは一の驚異といはなければならぬ。そこにランケの天才が認められる。

終りに、これが出來上つた時の事を紹介しなければならぬ。時は一八二四年、その十一月十七日の手紙で、彼はかの南獨で既に家族も出來て安堵して居るハインリヒに報道して『愛弟よ！私はわれらの生活の道の過ぎこし方を思ひ、かの汝がリューゲンへ立ち去つた初旅以來、これが如何に岐れて來たかを顧みると、私は今自分等二人が殆んど同時に一つの或る目的に到着したのを知る。私のは即ち今汝に送る書物である。……精密にいふと、それは固より一の紙の目的物に過ぎない。汝が既に到達して、今日汝の兩腕に生き／＼感ずる目的に比ぶべくもない。とはいへ、二つながら眞の目的ではない。眞理は、われら兩人が同時に新しい裝で世界に乗り出したといふことに止まる。神は汝に神の祝福を與へやう。私にも之を拒

み給はじ。遙かに遠い／＼どころに、私は自分の眞の目的を見る。私は望む、この眞の目的地で、われらふたり落合はう、よしわれらの進みゆく路が違つて居ても。』と、いつて居る。之によると、

ランケ自らは、この著作で彼の目的の或る最初の階段に達したと信じて居る。翌十二月には、かの伯林の文部省官吏カンブツ及びシユルツェに各新著一本を贈つた。すると、一週間内にカンブツから熱心な讃辭が到來した。その内にランケを歴史の恢復者と期待し、自分は機會あり次第大臣に推薦して歴史の教授に任用せしめる、歴史の文書が欲しいなら本省之が提供に吝かでないとさへあつた。これが最近にランケ、殊にその弟らが切りにあつたのであるから頗る面白い。

これで、ランケはプロシヤへの奉仕を見捨てな

職から中央の大學に拔擢され、先づその員外教授に任せられた。この榮轉は一八二五年四月ランケ齡二十九歳の時であつた。彼の伯林に於けるローマンチックとの接觸こゝに始らんとす。

① 『藝文』フィヒテ號（大正三年一月坂口昂『フィヒテとランケ』）

② Lebensgeschichte S. 77 Ausgewählte Briefe No. 1.

③ Do. No. 7.

④ Do. No. 14.

⑤ Diether, Ranke als Politiker.

⑥ Ranke, Geschichte der Romanischen und Germanischen

Völker nebst der Kritik neuerer Geschichtschreiber, Berlin, 1824.

⑦

⑧ Ausgewählte Briefe, No. 30.

五、ランケのローマンチック中期

伯林の青年教授

ランケの處女作『ローマ風ゲルマニ風諸民族の歴史』一八二四年秋出版に對し、明くれば春早々に伯林の有力なる新聞の一、スペーテル新聞紙上に

頗る賞讃を極めた紹介文が現はれた。曰く、『吾人はこの著者に於て一人の新らしい第一流の歴史家を歓迎する』と。これは實は有名なるフアルンルーゲン・フォン・エンゼの筆に成つて居た。ついでこの筆者その人から親切な手紙が著者たる田舎の一中學教師の許に致された。

抑もこの紳士は何人ぞ。彼は久しくプロシヤ官界にあつて、現にレガチヨンスラートの稱號を有し、當時伯林交際界第一流の名士であつた。彼はローマンチック文士で自由主義者であつた。この點で、時の政府から敬遠されて居るけれども、その關歴、その文才、その交際ぶりから、尙ほ上流社會と密接の關係を有つて居る。殊に彼の夫人がローマンチック史上、はた又た獨逸の女流傳中に於て、嶄然頭角を露はして居るラーヘルその人であつたことは、特に注目に價する。

ラーヘル・フアルンハーゲンは猶太人である。彼

女は夙に伯林にサロンを開き、名流を會し、婦人の解放、社會の改良、趣味の向上に努め、又たゲーテを崇拜し、ローマンチック文士で後メッテルニヒに信任された有名なゲンツとも親交あり、中年に自分より年若きフアルンハーゲンと婚し、その宛も母姉にも似たる貞淑さで夫を扶助し琴瑟相和し、多年伯林交際社會の中心となつて居る。この猶太婦人が社交上勢力となつた理由の一は、彼女の出身そのものにあるともいへる。何となれば十八世紀末はメンデルスゾーン以來、猶この迫害された種族解放の時期で、凡そ伯林の富める猶太人にして、新文明の恵みと光とに浴した家では、何等の傳説にも拘泥せず、形式にも囚はれないで、尤も自由にして尤もよろしき所を發揮することが出來た。今日伯林市民の氣風が幾分は在住猶太人に負ふところがあるといはれるのは、こゝである。ラーヘルはかゝる家に生れ、天成の才能で、自ら獨

立して自分のサロンを開いたら、窮窟な因習に束縛される王族(プリンツ・フェルチナンドの如き)や貴族等は喜んで彼女の門に奔つて、その自由にして知識的な空気にいそしんだのは自然であつた。そのうちに政治家も、軍人も、學者も、藝術家も居つた。

それであるから、一八二五年春ランケは伯林に轉任を命ぜられるや、こゝで早くこのファルンハーゲン夫妻に接近することを得た。これは彼の社交を磨き、知見を開き、『伯林の神々』^{グッセル}の消息に通ずるに頗る便利であつた。彼は最初大學と圖書館に程遠からぬ加特力教會(ヘードウイッヒキルへか)に極近い市の中央で、而も閑靜なところに寂しく住むだ。當初交友は多くなかつた。彼の最初のゼメスタの終の消息に、『ファルンハーゲンは私の尤も結構な知合となつた。……彼は熱心に聴講してくれた。彼は今溫泉に行つて不在なのは殘

念だ。』とある。更らに秋のゼメスタの始には、『私は今日ほごあらゆる歴史の裡に生きて居ることはなかつた。世界史の進歩で自分は最も旺んに満足する。しかし、その他では自分は全く寂しい。幾分の交通をなすのは只だファルンハーゲン夫妻だけだ。彼は再び聴講する。眞に親切な心の方で、この人との四方山話はいつても嬉しい』と報じて居る。然り、ランケの伯林生活の初は、田舎ものゝ都入りとて、ファルンハーゲン夫妻を除けば、殆んど孤獨に近かつた。

しかしながら、このランケにはこの唯一つの而も最も有力なる社交の中心を通ほして、幾ばくもなく彼に多數の知合が出来た。それは翌、一八二六年ごろからのことであつたらしい。そのころラーヘルラーヘルのサロンでベツチナ・フォン・アルニム夫人を知つたことはその主なる收獲の一である。この婦人は有名なローマンチック詩人ブレンターノの

妹でその親友アルニムに嫁して居る。而してランケより十歳の年長者だがラーヘルより十四歳若く且つ之について社交會の花で、活潑に、ナイーヅで、警拔だ。さきに少女の時に當時中年すぎのゲーテと熱愛したことがあつて、この關係を後、ゲーテも自分の夫もいづれも死んだ後で、一八三五年、ゲーテの一人の小供との文通』で公けにして居る。ランケはこの才媛と親しくなり、一八二七年

二月の書簡には、その精神的感激に満ちた雄辯を讚歎して、ビチアと綽字し、『自分は既に夫人の許で、しばぐ麗はしい夕を味つて、時々主人の歸宅する十二時まで長座した』と書いて居る。おもふに、ラーヘルのランケに對する、猶ほ阿母さんの如きであつたとすれば、ベツチナは猶ほ姉御の温情と權威とを有つて居つたらう。後年、この閨秀作家の前記の出版が公にされた時、ランケが自分の親友ハインリヒ・リッタに與へた手紙に 君がこ

の書中で天才、愛、美、藝術に關する一般的談論を讀むと、これは去ぬる一八二六年から七年まで私が丁度しばぐ彼處で聽いた涙若くば想であるトレネンキョウケンヂと思うてよろしい』と書いた。これは即ち彼がベツチナ夫人の豫言を伺つてから約七八年後の思ひ出であつたのである。

顧ふに如上の一八二六—七年はランケその人のローマンチックの絶頂期であつたらう。彼がファルンハーゲン夫婦及びベツチナ夫人を中心として接觸した雰圍は、官僚の反動に對抗する民主的氣分革命的傾向、美的精神、つまり『青年獨逸』ユングストイナラントの新味に満ちて居た。この新しい空氣の洗禮を受けたから、彼は頗る利益を得た、即ち之によつて一層時事問題に對する興味を深くし、あらゆる社會生活に對する同情理解を養ひ、且つ自分の言語文章を洗練琢磨し得たのである。

さりながら、彼の本質及びその發展は終にロー

マンテックそのものでなかつた。彼は民族及び國民を自己の對象として居る。當時代の民族及び國民といふ觀念はローマンテック思潮に負ふ所が多いのは勿論であるけれども、ランケのそれはローマンテック者流の大勢である在野的民主的傾向に全然雷同するものではなかつた。彼自身の語によれば、彼には自ら確信する自分の神があつた。彼の思想は一方に徧しないで、物の兩面を包容して居る、けれども、歴史家としての彼の進みゆく路はいつれにより多く傾いたかと云へば、民族及び國民のためにする君主制國家主義に在つた。故にランケは普通の意味のローマンテックには數へられ得ない。若し彼をローマンテックといふ範疇に入れなければならぬとすれば、寧ろ在朝のローマンテックに屬すべきである。

何にしても、既記の一八二六—七年にはランケのローマンテックがその最高潮に達して居るとい

へる。この時期に、彼の第二の著作が『南歐の諸君主及び諸民族、第一、オスマンリの並にイスパニヤ王國』が出来た。この書の動機如何。第一、彼の處女作がイタリヤのルチーサンス時代を取扱ふて居るから、彼の史眼がつきにうつりゆく所は當時同半島を東西から威嚇して居る二大勢力であつたことは自然であつた。第二、一八二〇年代はギリシヤ及びバルカン民族の獨立運動時代で幾多のフィルヘレーチが輩出し、就中英國ローマンテック詩人バイロン卿がミソロンギの疊烟瘴雨に殉じたことは、輿論に非常の感動を興へた。それでプフォルタ學院以來の古典教育に涵養された精神は伯林のサロンがインスバイヤするフィルヘチーチ熱をうけて、この青年學者の南方に對する動念を彌高めることになつた。故にこの研究問題の取方に於てローマンテックの影響が頗る認められる。尙ほ、前記の如く彼の文章の洗練は著しくこ

の新著に現はれて居る。處女作はナイーズで生硬を免れなかつたのであつたが、第二作品は頗る巧熟して文學的となつた。この進歩が伯林の交際界に負ふ所あるは、彼の思出の正さしく告白する所である、曰く『世界的教養ある名士との交際、而して私は沈黙してはよろしくない、同じ範疇に屬する才媛たちとの交際を。是等も亦た様式的に大なる感化を私に及ぼした。この點に於て都の雰圍氣は地方市の滞在よりも自分により強い力を與へた。それで、第一の作品に鈍重の觀を與へた多くのものが新著に於ては避けられた』と。尙ほ附加すべきは新著には國內の状態に重を置き、文化的面影を具へて居るといふ進歩も認められる。これらの描寫の際、自由主義のローマンチック連中が蛇觸視するカスチラの専制や、トルコの政治が、それ／＼その特徴を掴み出されて、頗る公正に判斷されて居る。著者は、畢竟、絶對專制主義の君

主政治に反對するも、理解ある賢明なる中央集權には同情を持つて居る。されば、新著はプロシヤの皇太子、後のフリードリヒ・ヴィルヘルム四世を始め伯林の官界の風尚に投じ、その著者は彼等との間で『偉大な頭腦』と認められた。それだけ反對に、サロンの連中には氣受よくはない。一八二八年二月ベツチナ夫人がランケに與へた手紙は明かに彼に不機嫌を漏らし、彼に仲違ひを宣し始めて居る。曰く、『貴下との御交際から大なる利益を導くには、私は只だ一事を除く外、決して之に當るものにては無之、即ちアンシオンも、皇太子もいづれも申さるゝ如く、貴下は一個の偉大なる頭腦に在らせられ、かくの如き方から尊敬され居るは私の或る名譽とする所に有之候事のみに御座候』と。随分皮肉である。アンシオンは皇太子傳を勤めて居る名士であつた。

所詮、伯林の青年教授は、その著『君主及び民

族』の發表に於て彼の生涯に於けるローマンチックの最高峰を越えたのである。

① O. Berlow, Rahel Varhagen, ein Lebens- und Zeitbild, Stuttgart, 1903.

Brandes, Literatur des 19. Jhd. Bd. VI: Das junge Deutschland, S. 276-306

Ellen Key, Rahel, eine biographische Skizze, II. A. 19 13.

① Briefe, No. 34.

② Do. No. 44

③ Do. No. 95.

④ Lebensgeschichte: Dicht im 1885. 8. 63

⑤ Diether, S. 93 Anmerkung.

六、ランケのローマンチック

後期 南方研究旅行

ランケの第二作品『南歐の君主及び民族』第一の緒言のうちに、著者は關係史料の存在状況を叙しその缺乏を訴へ、ヴェネチヤ共和國の外交文書探訪を尤も必要として居る。プロシヤ政府は此目的のために、この青年教授を差當り先づヴィーン

に派遣することとなり、公文で之を奥國宰相メツテルニヒに推薦した。ランケはこゝで自ら『ヴェネチヤ史のコロンブス』たらんと期して居た。この大望達成の唯一門戸として、この際ヴィーン駐在のプロシヤ公使は特にヴィーン公文書庫アルヒーブを開かれたしと願ひ出た。これは、當時極めて珍貴なるものとして秘藏されて居るものを一外國人に開放縱覽せしめることで、前代未聞の要求であつた。

翻てランケのヴィーン派遣の事情を内面から察する必要がある。彼の近業は、番に、前段に觸れておいたやうに、プロシヤで尊重されたばかりでなく、オーストリアに於ても亦た歓迎され、なほ獨逸以外に於ても、佛蘭西の著作家の間に可なり持離された。これらの評價は保守派からばかりでない、自由派の間にもあつた。後者の一人は即ちかの有名なアレクザンダ・フォン・フンボルトである。彼は久しく巴里に寓し、一八二七年五月、

最後に伯林に歸つて、こゝに永住することになつたのであるが、この際、ラーヘル夫人の許で、問題の著作の作者と懇ろに知ることになつた。この碩學はこの著作の大讃歎者であつた。彼は親しく皇太子にこの書を推薦し、文部省からランケの旅費支給の件について、親切に有力なる口添へをなした。更にこの關係よりも、一層肝要なるつゞき合は、ラーヘル夫人その人の援助であつた。彼女は前に注意しておいたやうに、有名なるローマンチック文士、今やヴィーン反動政界の利腕となつて居るゲンツと、昔から親密なる關係に立つて居る。プロシヤ公使のランケのために願ひ出たかの前代未聞の要求が、果してヴィーン政府から謝絶されて、青年歴史家が『コロンブス』たらんとする大望はあはや水泡に歸しやうとした。この際、ランケの發見船の難波を救ふたものは、かの伯林交際界からの紹介であつた。その結果、ゲンツは尤

も親切に周旋した。更らにその御蔭で、ランケはメツテルニヒにも面謁し、宰相の御聲が、りで、始めてかの大目的に接近することを容された。

されば、ランケの伯林に於けるローマンチック因縁が、彼の歴史の著作家としての權威の外に、ヴィーンに於て宰相の片腕たるゲンツの好意を迪らしめ、彼に非常の便利を得さしめたのである。實際、青年歴史家はしばしばこの老文士、否な老風流翰長を訪ねて談話を交へ、種々研究並に社交上好都合を與へられた。加ふるに、彼がヴィーンで樂んだ社交界の空氣は伯林に比べると、よしや親身でなかつたにしても、より多く派手やかで、より豊かに愉快なるものであつたことは、彼の書簡の物語る所である。それは當時のヴィーンの世界的位置が與つて居る。こゝはハプスブルグ家の舊都で、今や列國會議後歐洲外交の中心となつて居る。又たこゝはロンバルヂヤ・ヴェネチヤをも統

治する帝都であつて、ランケの次に轉遊すべきイタリヤ半島に向つて非常の勢力を張つて居る。この國のバルカン半島に對する威力は固よりいふまでもない。かゝる天下の檜舞臺に於て、萬事好都合に行動することになつたのであるから、ランケは單に文書探訪のみならず、自分の世界史的知見擴大の上にも、多大の好機會を掴み得たこと勿論であつた。

彼のヴィーンに入つたのは一八二八年九月で、こゝに殆んど一年間滞在した。それから更にイタリヤに送られてそこに一年半を費やした。つまり前後通じて、彼は五ゼメスタの間、大學を休講して居る。この南方旅行は伯林の自由主義のローマンチックからいへば、ランケのローマンチックの後期に屬するものであるけれども、若しランケの史學上の限りなき理想に向つてのあこがれをローマンチックとすれば、この南遊は正さしく一大ロー

マンチック生活で、専門と趣味に於てこそ異なれ四十年前のゲーテのイタリヤ旅行に比すべきほど、それだけ意味深長なるものがある。

この旅行期の通信は、主として愛弟ハインリヒと、それよりも一層多くは、當時伯林に居る同僚にして親友、哲學者ハインリヒ・リッタとに與へられて、中々興味があり、しばしばローマンチック氣分の高潮に達して居るのを見る。

ヴィーンから伯林の親友にウエチヤ文書館での調査の働き振りを報じて、『僕はこゝで自分の愛リースグーゲンシンドの對象——一人の麗はしいイタリヤ美人——と輝やく楽しい戀の會合する。われらの中にローマ・ゲルマニの寧馨兒ザンクキンドを擧げる』との如き當時研究旅行中の青年史家の得意が隨處に閃めいた。

一つ斷つて置くべき機會に到達した、それはランケの一身上の事である。吾々は彼に既に轉任の動機のあつたことを述べたが、實は彼の一身上の

振附方には、隠れた經濟上の理由も潜んで居たのである。それであるから、このヴィーン滞在中に一の誘惑が来て、稍彼を動かした所が見える。それは露領バルチック沿岸州のドルバート獨逸大學から、幣を厚うして招聘して来たことである。

しかし、圖書、交友、近親の關係上から終に斷つて仕舞つた。このころ、弟から兄の將來について心配して來たと見え、次のやうなランケの言葉を發見する『私の將來について汝の有つて居る意見には、私は元來同意しない。國家の官吏は私を魅しない。彼等は只だ稀に意義を有する。屬僚では他人の掌中の道具だ。そして私の功名心はさほど大きくない。何でも人生が何らかの高尙な偉大なものを作り出した一切のものゝ享樂、即ち私の神で満足して、生きてゆくのが私の願だ。まだ知られない世界史の發見が出來れば私の最大幸福だらう』^⑥

一八二八年の秋には、彼は多年のあこがれの國

土イタリヤに下つて、ヴェネチヤで水上の貿易市の客となつた、その間尙ほ附近の本土へも觀光に出かけ、ヴェロナで、圓劇場の遺跡や、スカラの紀念建築を憑吊し、或はマニトヅアでは、ナポレオン時代のプロシヤ大臣ハウグヴィッツを、その老後の思出執筆中の閑居に訪れた。この際ヴィーン中央政府へ交渉を要する事情があつて、彼は一先づ早くヴェネチヤを引揚げ、翌くれば一八二九年二月ポロニヤを経て、雪のアベニノを越え常盤の橄欖と、つのめぐ麥とで青々したトスカナの平野に下り、フロレンスに入り、アルノ河畔で、陽氣なカルテヴル祭も眺め興じ、遂に轉じて久遠の都羅馬に到り、茲に足を留めた。

フロレンスでは『古今の美術の樂、自然、親切な人情、それに圖書館や文庫に於ける探訪、これらの事で美はしい數週間を過した。……こゝで古代は始めて自分の面前に現はれ 宛らこれまで

何も見たことないかのように』彼の印象に深く映じた。又た羅馬では報じていふ、『私は今は古代と現代との間をいはゞ往來して居る。しかし、大體自分のつとめに忠實である』と。この羅馬滞在の息抜きに、秋の始に一寸山紫水明のナポリの觀光に出かけ、宿に歸つてから、樂かつた三週間を報じて、『かしこでは自然と古代といつても新しく珍らしい。われらに無數のこれまでにない印象を與へた』とて、この南國の港市特有の繁華と雜沓とを敘述し、之を羅馬の閑寂と枯淡とに對照さし、その古代につきては、『古代の事物が自分の専門であつたならば、私はこゝに二三年も淹留したらう、よしや自分がラッザローチとして生活しなければならなかつたにしてもだ』とは、餘程ナポリの氣分に魅せられたものと想はれる。

ランケの羅馬滞在約一年間のうち、特に注意すべきはその地の社交關係であつた。當時はプロシ

ヤ公使ブンゼンの駐在期である。この政治家は同時に學問を好み、當時斯界に於ても一流の位地を占め、羅馬の考古學會創立に與り、又た自分も『羅馬府の記事』を著はし、盛んにサロンを開き、羅馬交際社會の中心となつて居る。これがブンゼンの生涯中尤も花やかな時代であつた。ランケは屢々こゝに出入し幾多内外の人物に接觸し、恰も歐洲政界多事の際であつたから、彼の知見を啓發し得る所尠くはなかつた。

この頃、ローマンチック詩人ブラーテン伯も、ランケと同じく、恰も南方旅行中で、一八三〇年四月、一人の友人に與へた手紙に、『この冬私の主な際は、ランケといふ一人の極めて才能に富める青年歴史家であつた』と報道し、更に翌年春、他の一人に與へた手紙には、『君、彼に於て身體こそ些やかな小男なれ、ラウメルとは全く異つた歴史家を發見するだらう、この人から皇太子は多

くを學び得るであらう』といつて居る。ラウメルはランケの先輩たる伯林の教授である。

ランケが、羅馬を去る前に、弟に送つた述懐は頗る面白い。『三十歳の齡がわれら二人を通り過ぎたぢやないか、いつまでわれらは生きながらうべきか』と前置きして、『何か私について話せとならば、私の主要計畫が可なり好都合に運び、豫期以上の蒐集が出来たことを諒知して貰いたい。自分が殆んど附け加へないで、徐々におのづから、近代の最重要機の一つの歴史が自分の手許に集積して來た。私は自分が何するために生きたかを知り之に満足して居る。これらの材料を取扱うていつか一個の重要な述作を仕上げる、その幸福を豫感すると、私の胸は歡びの鼓動に波立つ。自分が認識した真理から一指の巾だけでも離れないで、これを實行完成しやうと私は日々誓うて居る。人或はよく私を非難する。私の遣り方があまり遠くゆ

きすぎる、御仕舞の目的はもつと近路を取つても到達せらるべきだ、他國に長く棲むとそれだけ私に損するといふ。さはさりながら、私はたいこれ聞き流し、そして矢張りこれまで通りに行る。……苟も始つたものを途中で中斷すると、踏みはづしたといふ痛ましい感じが、一生を満たすだらう。それに今の自分は昔よりも罪深くなつて居る。そして自分の齡をいつまでも尊敬されまいから、私は一切を仕上るまでかう生活しやうと思ふ。』

ランケの意味深き天職が、かくの如くにして彼の決心に固く結びついたのである。

歸途は再びフロレンスに三月滞在し、ヴェネチヤにも二たび數月淹留し、こゝで見残した外交文書を調べ了つた。その頃のことである、弟から呉れた手紙に、『兄は若い時に願はしく思つたものゝまだ若い間に手に入れた』とあるのを受けて、親友に告げて曰く、實際、『君主及び民族』の緒言には

望みはさておき、願ふをも辛うじて敢てしえたヴ
エチチャ外交文書の一つに纏つたつなかりをまの
あたりに見るといふことが、今は十分でないにし
ても、あらゆる豫期以上に自分に許與された」と
満足して居る。

以上はランケの二年半間の南方旅行の大要であ
る。之によつて、その目的たる近代世界史を構成
すべき重要史料の蒐集が達せられた。これと同時に
彼の史観が一層擴大充實した。何となれば彼は
この間に南方の文藝とその生活を具さに味つたこ
と、及び現代の時事問題に親しく接觸することが
出来たからである。彼が後まもなく『南歐の君主
及び人民』の續篇として有名な『羅馬法皇史』を物
したのは、いはずもがな、『イタリヤの詩の歴史
に』と、『イタリヤの美術の歴史に』といふ二篇の
バイトレーゲを發表して居るのも、正さしく南方
旅行の産物に外ならない。この時の經驗は彼に頗

るセンチメンタルな印象を與へたもので、當時旅
行先からファルンハーゲンに送つた手紙に、『生活
の浪は輕いうねりして私の足もとに戯れる』とい
ひ、後年老境に入るまに、近親のものにしば
し、羅馬滞在の昔を思ひ出で、『當時われらの間
では若々しくあるのが習はしであつた』と物語る
が常であつたといふ。

時事問題につきては、當時革命の荒波が、南に
はた東に立ち騒ぎ、やがて中央にも、推しよす
べく見えた時期である。ヴィーン滞在中、こゝで
彼はセルヴィヤの獨立事件に關係した同國の亡命
の名士、ウツク・ステファノヴィツチ・カラチツチと
交はり、その供給した材料で『セルヴィヤ革命史』
を書き、これがイタリヤ旅行中に公にされた。彼
はこの未開民族のために、よしやヴィーンの政治
家には面白く思はれないことが明かであるにもか
ゝはらず、頗る公正な記述を試み、その内にこの

剛健な人民の英雄ぶりを謳うたところがあるから晩年の或る機會に、自ら戯れに『セルヴィヤ人のホーマー』と名乗るの愉快を有つた。又たかの羅馬の活潑な談論社會では、一八二九年既に佛蘭西に革命が近づいたとの話柄が持上がつて、シャール十世が、英國のジエームス二世の如く逐電するだらうなど、豫測された。一體ランケは夙にヴィーン滞在中、歐洲の革命的風潮の催しを感じて居つた、だが、一八三〇年、イタリヤを歸國の途上、早くも七月革命の飛報を耳にしやうとは豫期しなかつた。されば、十月、ヴェネチヤから伯林の親友に宛て、『僕は政治上事變について最も深く感動させられ、今結ばれて來た事物とわれらの生涯を左右しなければなるまいと確信して來た。私は輿論と可なりに決然たる反對に立つべき悲むべき運命を抱く。凡そ偉大な國民には、一個のより偉大で、これを制馭する、而も歐洲を征服しやうと思

はない國王の在すことが願はしい。……職工の若者や市井の小僧がわれらを支配せんと欲す、これをも忍ぶべきか。』と頗る激越なる調子で自分の胸中を談つて居る。書中の所謂輿論とは、即ちランケの伯林に於ける友人にして保護者たるファルンハーゲンらを中心とする『青年獨逸』が、伯林に於て代表的に鼓吹するものであることは、いふまでもない。

この感激の一節——伯林の一親友に對する私信であるけれども——いはハランケ歸朝後の活動の前觸れとも見られる。之を前觸れとして、明くれば一八三一年正月にアルペンの雪を越えて、ラインの上流に出で、再び獨逸の土を踏み、途すがら方さに起りつゝある藝術市ミュンヘンにさすらひ、次に愛弟の住める中古の名都ニュルンベルグにも立寄りて、三月末には終に任地に歸り、三年ぶりに夏のゼメスタの仕事に取りかゝつた。彼は

果して如何なる活動に出づべきか。

- ① Ranke, Fürsten und Völker von Südeuropa, I. Die osmanische und spanische Monarchie Berlin 1827.
- ② Briefe, No. 48.
- ③ Do. No. 52, 53, 55.
- ④ I. o. No. 55.
- ⑤ Do. No. 55.
- ⑥ Do. No. 70.
- ⑦ Do. No. 72.
- ⑧ Do. No. 74.
- ⑨ Do. No. 78.
- ⑩ Zur Gesch. der ital. Poesie (Gelesen 1885) und Zur Gesch. der ital. Kunst. (Veröffentlichung 1878) : S. W. 51-52.
- ⑪ Briefe, No. 77.
- ⑫ Lebensgeschichte, S. 64, 209 (Briefe No. 63)
- ⑬ Briefe, No. 78 (S. 241-242.)

七、結論　かく生立つた歴史家

私は以上、政治上ではナポレオン、否な寧ろ適當にいへば反ナポレオン時代、文化史上ではローマンチック時代の環境に於て、ランケが如何に生ひ立つたかを、略ぼ窺ふた。因て今、かくの如

くして如何なる歴史家が作り上げられたかを述べて結論とする。

之を通覧するに、ランケの幼少からの生立は、最初から、十八世紀の風潮たる啓蒙及び古典主義時代の自主自立的思索の流風を受けて居たことは明かである。而して年稍長すると共に、彼は漸く反ナポレオン及びローマンチックの潮流の裡に、若くばそのほとりに接近し、この大なる世界改造時代のイデーに感じて來たと結論せらるべきである。しかしながら、ランケのローマンチックから受けた感じは、彼の最初の生立若くば彼の本質をその中心まで動かすに至らなかつた。彼の蒙つた影響は、無論有力且つ廣大であつたけれども、寧ろそれが彼の外形生活に在つたのである。彼はこれが爲めに社交上の切磋琢磨を享けた。彼はこれがために言語文章の洗鍊を受けた。彼はこれがために現代生活のあらゆるものを感じ、之に同

情の出來るやうになつた。彼はこれによつて多年自分の胸中に醸されて來て居る近代の世界史作成上、幾多の問題と、その解釋につきての暗示をかち得た。然り、而もかくの如く多大なる感化とそ

の利益を享受しながら、彼の衷心に潛み、彼の境遇の進化と共に發展し來れる中核的性質は、遂に本質的には改造されなかつた。即ち自主自立の歴史家たることは是れである。故に彼には兩面若くば兩様の性質が具備して居る。その一は他よりもより有力に、他よりもより本質的のものである。彼はよしやローマンチックに感じたにしても、遂にその急進的自由主義に馳せなかつた。換言せば、彼の生立によつて制約された彼の史學は、尙ほ本質的には自主自立を失はないで、而も大なる時代の風潮によつて幾分のローマンチックの衝動とそ

の利益を受けて向上し、且つプロシヤ王國の保護を被つて大成したと言へる。

この結論を少しく具體化するために、私はランケの南方旅行から歸任後數年間の公生涯を概瞥して置かう。

彼は吾々の見たる如く狂熱的愛國運動の渦中に陥らなかつた。彼の行路は、勿論時に他へそれる危機に接したことはあるも、遂に生涯伯林に安住することになつた。その上にオーストリアの政治家とも良好の關係が出來て居る。又た第三の獨逸的國家バヴアリア王國とも、その君主ルードヴィッヒ一世のフィルヘレーテ、及びその皇太子、後のマキシミリアン二世との親密な關係によつて、確かな連鎖が結ばれた。それでランケの自主自立的史學は獨逸の三大國と提携するの運命を有して居る。

彼は時と共にその史學を以て時局に關係するやうになつた。一八二六年、まだ伯林の青年教授職の初期、スペーテル新聞社から彼に投稿を求めた

時、彼は研究多忙の理由でにべなく之を拒絶した。然るに南方旅行の初期、ヴィーン滞在中、『歴史及び國家學年報』から執筆を乞はれた時、彼は如何に答へたか。曰く、『世人は政見を歴史の基礎の上に置かないで、却て政見を以て歴史を制取せんとす。かくの如きは學術の自由を破壊する企である。貴社は之に反對するものであると信じ、自分は投稿の義務に服するを欲しない、只だ權利を有したい』とて、寄稿者中に加へらるゝを默諾した。それから彼が歸朝した際、伯林の官界及び保守主義者の間では、健全なる學術的基礎に立ち、七月革命の流弊を壓伏する宣傳の必要が感せられた。そこで種々人選の後、この大任が新歸朝者歴史家ランケに托さるゝことゝなつた。即ち一八三二—一八三六年間の『歴史政治雜誌』の發刊であつた、かくの如き直接實際の目的を有する出版物の主筆として、ランケの如き自主自立の歴史が

果して永久に成功すべきやは、容易に推測される。當時、或る皮肉屋はランケを目して、肴でもない肉でもない諷刺して居る、彼が數年前に熱心に接觸したかのファルンハーゲン等を中心とするローマンチック自由派や、ユングストライテライ『青年獨逸』連中から疎外されたのはこの時期である。されど、彼の穩健中正は微温的だとして熱狂的愛國者や保守主義者の間からも歡迎されなくなつたのは自然である。彼は次第にサヴィーニ等の堅實なる歴史派的學者の交友界並にその思索圈に入つて行つた。

畢竟、ランケの使命は直接の實用に供せらるゝ史學に在るのではなかつた、一方では多數の有爲なる後進史家を誘導し、他方では全集五十四卷及び世界史九卷、即ち眞に等身の書に於て彼の勞作の永久的記念物を殘し、以て自主自立的史風を完成したるに存する。而してかくの如き史學は、彼の九十一年の生涯の上三分の一期に、主としてそ

の基礎を置かれたのである。

最後に、ランケの結婚につき一言して置きたい。彼は一八四三年佛英兩國旅行の時、英國婦人

——愛蘭土血統の——クララ・グレーヴス嬢を

巴里にて知り、その年の秋、英國の西北部ウエス

トモリアランドの田舎の或る教會で式を挙げた。

この結婚までの道ゆきは、彼の報道する所に據り
彼言らの言語を假りて一言にいはい、實に『殆ん

ごローマンチックの出來事』に屬して居るといへ
る。時に彼四十八歳であつた。^①

私は、ランケがその九十年目の誕辰に發表した
一篇の思出の内から、彼の言葉を引用して本講の
結びとしたい、曰く、『一個の生涯は單個の事件
から結成されない。人間を教養するは學校でない
人生である。人間は一個の樹木の如し、その力を
土地ばかりから非常に取るのではない、これを空
氣と光とから、風と天候とから、暴風雨そのもの

からも受けるどころ甚だ大である』^②と。一見平凡
なやうで實は眞に味ひのある譬喩で、まさしく彼
自らの青年としての生立に適合する。(前號所載本篇
首引用にかゝる獨文参照)

諸君！ 私の講演はこれにて竭きます。若しこ
れが純知識といふ主要目的以外に、偶然にも凡そ
時局の發展と史家の生立との間に大いに有りうべ
き相互關係につき、何等かの暗示又は類推を、
おのづから諸君に提供し得たならば、私は本講演
の望外の仕合であらうと思ふ。御清聽を感謝しま
す。

① Briefe, No. 41.

② Do. No. 55.

③ Do. No. 133-138

④ SW. Bd. 5152. Abhandlungen. S. 592.